

情報公開文書

1. 研究の名称

静岡国保データベースの多面的解析による医学的エビデンスの創出

2. 研究組織

研究機関	静岡社会健康医学大学院大学
研究代表者	田原康玄 静岡社会健康医学大学院大学 研究科長・教授
管理責任者	田原康玄 静岡社会健康医学大学院大学 研究科長・教授
研究者等	本研究に関わる研究者等（共同研究機関を含む）、ならびに研究テーマについては別表参照

3. 研究の目的・意義

我が国では、戦後、衛生環境が格段に改善され、また主要な疾患である循環器疾患の予防が進んだことで平均寿命が大きく延伸した。反面、認知症や要介護、フレイルなど、人口の高齢化によって増加した疾患に対する対策が求められるようになった。平均寿命の延伸には、新たな治療薬や治療方法が開発されたことにより医療の進歩が寄与する部分も大きい。しかし、全ての治療薬/治療方法に十分なエビデンスが揃っているとは必ずしもいえず、なかでも比較的頻度が低い疾患については通常の臨床研究からエビデンスを導き出すことは困難である。

レセプトデータは、研究目的で構築されたデータベースではないことから、医学研究への2次利用には一定の限界はある。しかし、処置や処方など診療報酬請求に必要な全てのデータが正確に記録されているため情報量が多く、また規模が莫大であるため頻度が低い疾患を研究対象にできるなど、通常の観察研究にはないアドバンテージがある。なかでも国民健康保険（後期高齢者医療制度を含む）は我が国で最も加入者が多く、また新生児から高齢者までをカバーしているため、そのレセプトデータを利活用した医学研究からはこれまで不足していたエビデンスを補う知見が多く得られることが期待される。

国民健康保険団体中央会では、基礎自治体の保健事業にレセプトデータを応用すべく、医療レセプト、介護レセプト、健診データを突合したデータセットを作成している。そこで本研究では、静岡県下の全ての基礎自治体からこの国保レセプトデータ（KDB）の提供を受けて県単位で分析することで、医学・医療の進歩に資する知見を得るとともに、その成果還元から静岡県民はもとより、人類の健康増進に貢献することを目的に本研究を立案した。

4. 研究に活用する情報

静岡県下の35市町から、静岡県国民健康保険団体連合会経由で提供を受けた2012年度以降のKDBデータを横断面、縦断面から解析することで、研究目的の達成を目指す。KDBに含まれる

個人情報や個人識別符号は静岡県国民健康保険団体連合会で削除され、匿名化番号（KDBID）が付与された状態で提供を受けるため、研究者等は個人情報等を扱わない。KDBID と個人情報との対応表も研究機関では保持しない。

5. 情報の活用方法

KDB データは静岡社会健康医学大学院大学本館 1 階の KDB 解析室に設置したパーソナルコンピュータに保存・運用する。当該解析室は常に施錠され、登録者を限定したカードキーでロックを解除した場合のみ入室できる。非登録者のカードキーで認証を試みた場合は、守衛室で感知される。また、本館への入室にもカードキーによる認証が必要である。KDB データは、専任教員室に設置した PC（デスクトップ型）でも保存・運用する。KDB 解析室と同様に、専任教員室への入室もカードキーでの認証が必要になる。

KDB データが入った PC はオフラインで運用する。KDB 解析室に設置した一部の PC は、インターネット経由で画面を共有することで遠隔操作を行うが、インターネットを介して解析室外に送信される情報は、PC の画面に表示された情報のみであり、KDB データそのものが送信されることはない。

KDB データから解析用データセットを切り出して統計解析に使用する。解析用データセットは統計解析用に加工されたデータセットであって個人情報を含まないことから、静岡社会健康医学大学院大学が契約する Google Drive に保存し統計解析に使用する（解析用 PC や可搬性のある記録媒体に保存することを禁止して情報の流出を防止する）。

6. 本研究に関する情報公開

本研究の対象者は、研究責任者の承認の下、研究の実施や独創性の確保において支障のない範囲内で本研究に関する資料や実施計画書等を閲覧することができる。

7. 研究資金

静岡県からの社会健康医学研究委託費で賄う。将来的には公的な競争的研究資金を確保し、研究費用に充当する。

8. 倫理審査

本研究は、静岡社会健康医学大学院大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施している。

9. 研究期間

本個別研究の実施期間は、審査承認日から 5 年間とする。ただし、研究の進捗によっては、研究倫理審査委員会の承認を得て研究期間を延長する。

10. 利益相反

本研究に携わる研究者の利益相反は、「静岡社会健康医学大学院大学利益相反マネジメントポリシー」「静岡社会健康医学大学院大学利益相反マネジメント規程」に従い、静岡社会健康医学大学院大学利益相反審査委員会で適切に審査している。

11. 情報利用の拒否について

本研究への情報利用の拒否の申し出があった場合は、静岡県国民健康保険団体連合会の協力を得て、KDB データの年度更新のタイミングで申出者の情報を削除する。ただし、それまでに開始した研究については、当該対象者の情報を継続して利用する。

12. 相談窓口

本研究事業に関する個別相談

静岡社会健康医学大学院大学社会健康医学研究科 教授・田原康玄

所在地 〒420-8527 静岡市葵区北安東 4 丁目 27 番 2 号

電 話 054-295-5400（代表） メール tabara@s-sph.ac.jp

静岡社会健康医学大学院大学の相談窓口

静岡社会健康医学大学院大学 教務課研究支援室

所在地 〒420-8527 静岡市葵区北安東 4 丁目 27 番 2 号

電 話 054-295-5401 メール kenkyu@s-sph.ac.jp

別表 研究者と個別研究テーマ

番号	研究テーマ	研究責任者	分担研究者	共同研究機関	研究期間 (年度)	終了年度
001	レセプトデータを用いた 2 型糖尿病患者における心不全入院の発生率および医療費・医療資源に関する後向きコホート研究	宮田裕章	隈丸 拓・平原憲道・西村志織・中谷英仁・香坂 俊	慶応義塾大学	2019～2022	2022
002	SKDB データベースによる带状疱疹及び带状疱疹後神経痛の発症リスク因子解析	八木宏明	後藤晴香・中谷英仁	静岡県立総合病院	2019～2023	2021
003	SKDB データベースによる医療・介護システム評価研究	宮田裕章	野村周平	慶応義塾大学	2019～2021	2021
004	SKDB データベースによる免疫チェックポイント阻害薬の薬剤使用と副作用の実態調査	山本博之	宮田裕章・一原直昭・隈丸 拓・平原憲道・中谷英仁・小谷仁人・嶋田光希・森 潔	慶応義塾大学	2019～2023	2021
005	SKDB データベースによる手術や処置とアウトカムの関連性について	山本博之	宮田裕章・一原直昭・隈丸 拓・中谷英仁	慶応義塾大学	2019～2023	—
006	レセプトデータを用いた高齢者のフレイル測定、評価指標と薬剤使用実態や臨床アウトカムとの関連に関する研究	宮田裕章	隈丸 拓・西村志織・香坂 俊・庄司 聡・諸星一城・中丸 遼	慶応義塾大学	2020～2023	—
007	レセプトデータに基づく疾病の頻度、年次推移、地理的分布、および季節変動の推定(重症う蝕)	一原直昭	宮田裕章・小坂 健・相田 潤・大野幸子	慶応義塾大学	2020～2023	2021
008	SKDB による循環器疾患・フレイルと生活習慣病の関連解明	田原康玄	栗山長門・尾崎悦子・佐藤洋子・朝比奈彩・小川紋	—	2020～2024	—
009	悪性腫瘍と医療機会の関連	小島原典子		—	2020～2022	2021
010	スタチンと膵癌発症の関連解析	齋藤光平	中谷英仁・佐藤洋子	静岡県立総合病院	2020～2021	2021
011	院外心肺停止蘇生後患者の長期予後に関する研究	山本博之	三吉貴大・嶋田光希・一原直昭・隈丸 拓・平原憲通・宮田裕章	慶応義塾大学	2020～2021	2021
012	KDB データを用いた大動脈弁置換術後の成績の研究	植木 力	山本博之・嶋田光希・和田拓己	慶応義塾大学	2020～2021	2021
013	多発性のう胞腎の新規治療薬剤に関する研究	山本博之	斎藤龍太・嶋田光希・一原直昭・隈丸 拓・森 潔・宮田裕章	慶応義塾大学	2020～2021	2021

014	KDB を用いた慢性硬膜下血腫術後再発および再発抑制因子に関する検討	中谷英仁	宮腰明典・佐々木八十子	—	2021～2023	2023
015	後期高齢者における経カテーテル的大動脈弁置換術後の予後と身体的フレイルの関係の検討	中谷英仁	植木 力・佐々木八十子	—	2021～2025	—
016	高齢糖尿病患者の長期予後の実態調査および健康寿命延伸を目的とした血糖管理目標の個別化と薬剤選択の最適化に向けたコホート研究	佐藤洋子	斎藤光平・中谷英仁	静岡県立総合病院	2021～2023	2021
017	口腔と全身の健康に関するエビデンス創出のための研究	佐藤洋子	山本精一郎	—	2021～2025	—
018	残差交絡量を最小にする層別平均因果効果推定法の開発と SKDB データへの適応	佐藤洋子		—	2021～2025	2022
019	SKDB を用いた食道癌の発症リスク因子解析	中谷英仁	佐藤真輔（客員研究員、静岡県立総合病院消化器外科）、大畑絵美（客員助教、株式会社 4DIN）、佐々木八十子	静岡県立総合病院	2021～2024	—
020	SKDB を用いた大腿骨骨折の患者における死亡に関する予後因子の同定	中谷英仁	佐藤洋子	—	2021	2021
021	疾病保有者のスーパー相対死亡リスク部分集団の検出法開発と SKDB への適応	中谷英仁		—	2021～2025	—
022	SKDB を用いた間質性肺疾患の患者特性・診療実態、予後因子の解明研究	中谷英仁	宮下晃一・穂積宏尚	浜松医科大学	2021～2023	2023
023	静岡県国民健康保険データベース(SKDB)による生活習慣病および慢性腎臓病に関するハイリスク患者の特性を明らかにするための解析研究	中谷英仁	森 潔・土手 尚・菅原 照・宮地良樹		2021～2024	—
024	一般市民における急性腎障害のリスクおよび予後に関する社会健康医学的研究	森 潔	土手 尚・中谷英仁・佐藤洋子・菅原 照・山本精一郎・田原康玄・宮地良樹		2021～2023	2022
025	静岡 KDB を用いた脳性麻痺患者の死亡時期とその原因について—呼吸器関連症は直接死因と関連するか？—	田原康玄	田原康玄・藤本 陽・中谷英仁		2021～2023	2023
026	多発性骨髄腫患者における自家末梢血幹細胞採取の検討:化学療法併用と plerixafor 使用の医療費について	田原康玄	中谷英仁・佐藤洋子・朝比奈彩		2021～2022	2021
027	SJS/TEN 及び DIHS/DRESS の静岡 KDB を用いたリスク因子解析	中谷英仁	生形奈菜子・宮地良樹・橋爪秀夫・佐々木八十子		2021～2024	—
028	ヒドロクロロチアジドによる降圧薬療法と皮膚がん発症に関する研究	中谷英仁	橋爪秀夫・佐々木八十子・宮地良樹		2021～2023	2023

029	スタチン製剤が有効である部分集団の同定及び予測モデルの開発	中谷英仁	舟木大登・齋藤洗平・金田秀昭	静岡県立総合病院	2021～2023	2023
030	予防的婦人科臓器切除術の卵巣癌・卵管癌・腹膜癌発生リスクへの影響	山本精一郎	中谷英仁・佐藤洋子・市川義一		2021～2025	—
031	オレキシン受容体拮抗薬による大腿骨骨折への影響	山本精一郎	吉岡良造・中谷英仁・田原康玄・佐藤洋子		2021～2023	2023
032	新規発症の大腿骨骨折患者における予後予測ツールの作成	中谷英仁	大畑絵美・金田秀昭・高木明		2021～2023	2023
033	慢性腎臓病患者におけるリハビリテーションの実施効果	藤本修平	小向佳奈子、中谷英仁、佐藤洋子、森潔		2021～2023	2023
034	先天性小児外科疾患を持つ児の遠隔期における問題点の検討	佐々木八十子	三宅 啓		2021～2023	2023
035	がん早期発見・早期治療に伴う医療費削減効果の検討	山本精一郎	中谷英仁、佐藤洋子、我妻信和、内海貴裕、星野伸晃、西川佳孝	京都大学	2021～2024	—
036	アルコール使用障害患者の予後因子解析	佐藤洋子	相曽晴香、天笠崇、山本精一郎		2021～2025	—
037	組織欠損に対する遊離組織移植による再建手術における術後合併症に対するリスク因子の探索	中谷英仁	北辻 まき、佐藤 洋子		2021～2023	2021
038	抗ヒスタミン薬とう蝕発生の関連	中谷英仁	今市悠太郎（客員研究員）、福富友馬	独立行政法人 国立病院機構 相模原病院	2021～2024	—
039	アレルギー性疾患とてんかん性発作の関連	森 潔	今市 悠太郎、中谷 英仁、佐藤 洋子		2021～2023	2023
040	SKDB を用いた胆石症発症に関するリスク因子解析	中谷英仁	東園 和哉、藤本 修平、佐藤真輔（静岡県立総合病院）、渡邊昌也（静岡県立総合病院）、大端考（静岡県立総合病院）、金本秀行（静岡県立総合病院）、大場範行（静岡県立総合病院）		2021～2023	2023
041	認知症・脳血管障害・骨折に対する入院時リハビリテーションの頻度・期間が退院後の要介護度およびその経過に与える影響：静岡国民健康保険データベース（SKDB）を用いた検討	藤本 修平	中谷英仁、佐藤洋子、小向佳奈子、津川友介	University of California, Los Angeles	2021～2024	2021
042	チロシンキナーゼ阻害剤治療を受けた慢性骨髄性白血病患者の有害事象リスク因子解析	田原康玄	中谷英仁、佐藤洋子、朝比奈彩		2021～2023	2023

043	市町における脳卒中予防対策の優先度の検討、及び静岡県における脳卒中発症に対する社会経済学的リスク因子の探索	中谷英仁	佐藤 洋子, 八田 太一, 藤本 修平, 山本 精一郎, 森 潔, 田原 康玄, 金田 秀昭		2021~2021	2021
044	KDB を用いた高齢者の急性期脳梗塞に対する機械的血栓回収術後の予後および経済効果の検討	中谷英仁	宮腰 明典(客員助教)、生形 奈菜子(客員研究員)、佐々木八十子		2021-2025	—
045	後天性血友病 A 発症のリスク因子解析	中谷英仁	朝比奈彩, 今市悠太郎, 大畑絵美, 大嶋美智子, 浦野 哲盟		2021-2023	2023
046	訪問診療を受ける高齢者の入院リスク因子の検討	田原康玄	宮地紘樹		2021-2024	—
047	SKDB を用いた成人膠芽腫の発症リスク因子解析	中谷英仁	生形奈菜子、宮腰明典、三宅啓		2022-2023	2023
048	経口抗菌薬の処方状況と、薬剤耐性菌感染症などの有害事象に関するSKDB 研究	中谷英仁	相曽晴香, 市川義一, 土手 尚, 舟木大登, 三宅啓		2022-2025	—
049	下肢大切断術後患者における死亡に対する予後因子探索	中谷英仁	新谷恒弘、北辻まき、木下和生		2021-2025	—
050	重症下肢虚血に対する血行再建術の有用性評価	臼井健	新谷 恒弘、北辻 まき、中谷 英仁		2022-2024	—
051	SKDB を用いた特発性正常圧水頭症の発症リスクと予後因子解析	栗山長門	宮腰 明典、中谷英仁		2022-2024	—
052	健康寿命の延伸など健康に関する数値改善の施策立案のための研究(県指定研究-3)	佐藤康仁	山本精一郎		2022-2023	2023
053	静岡県における尿蛋白、eGFR の脳血管疾患及び心血管疾患、死亡との関連	菅原 照	中谷 英仁、塩谷 祐実、植木 力、栗山 長門		2022-2024	—
054	健診項目からの維持透析導入の予測モデル開発	菅原 照	中谷 英仁、大城 裕莉		2022-2025	—
055	Clostridioides difficile 感染症の発症リスクの探索と発症予測モデルに関するデータベース内コホート研究	山本 精一郎	齊藤 喬、佐藤 洋子		2022-2024	—
056	特定健診質問票における口腔機能関連項目の解析	佐藤 洋子	田原 康玄、徳田 智衣		2022-2025	—
057	結節性硬化症の臨床的特徴・予後・診療実態の疫学的調査	藤本 修平	宮地 良樹、山本 精一郎、岸田 諭		2022-2024	—

058	静岡県における妊娠高血圧症候群（HDP: Hypertensive Disorder of Pregnancy）患者の実態：SKDB を用いた記述疫学研究	佐藤 洋子	竹原 啓、田原康玄		2022-2024	—
059	スタチンとフィブラートによる横紋筋融解症発生の関連	中谷 英仁	曾布川洋平、八田太一、舟木大登		2022-2024	—
060	KDB を用いた多剤併用と大腿骨近位部骨折発生リスクとの関連の検討	佐藤康仁	中谷英仁、大畑絵美（客員助教、株式会社 4DIN）、 畠山洋輔（東邦大学 社会医学講座）、大西遼（東邦大 学 社会医学講座）、平田幸輝（東邦大学 社会医学講 座）		2022-2024	2024
061	虫垂切除による大腸癌の発生リスクの確認	中谷英仁	東園和哉		2022-2024	—
062	薬剤性肺障害発生の因果リスクが推定される医薬品の探索	中谷英仁	舟木 大登、穂積 宏尚、宮下 晃一		2023-2026	—
063	腎機能分類と医療費の関連性に関する研究	中谷英仁	大城裕莉、齋藤千紘、土手尚、大野浩充（アライドメ ディカル株式会社）、菅原照		2023-2026	—
064	フルオロキノロン系抗菌薬による大動脈イベント発生の因果リスクの 推定	中谷英仁	植木力		2023-2026	—
065	レセプトと健診データを用いた糖尿病発症予測の研究	臼井健	佐藤辰宣（静岡県立総合病院）、大畑絵美（客員助教、 株式会社 4DIN）、大城裕莉、中谷英仁		2023-2025	—
066	脂質異常症治療における因果フォレストモデルを用いた高ベネフィット アプローチの有用性評価	中谷英仁	渡辺亮、舟木大登、宮腰明典、菅原照		2023-2025	—
067	糖尿病患者における膵癌発生のリスク因子の検討	臼井健	佐藤辰宣（静岡県立総合病院 消化器内科）、中谷英仁		2023-2025	—
068	橈骨遠位端骨折における二次性骨折リスク因子の検討	中谷英仁	長谷奈那子、高木明		2023-2025	—
069	高齢者における急性 A 型大動脈解離の術式選択の妥当性について	田中仁啓	有馬大輔、佐藤洋子		2023-2025	—
070	带状疱疹治療薬によるアシクロビル脳症発生の因果リスク推定	中谷 英仁	萩原諒也、菅原照		2023-2025	—
071	大腸癌の発症における高血圧の影響についての研究	木下 和生	栗山長門、中谷英仁、水野仁美		2023-2025	—
072	卵巣癌の治療進歩に伴う医療費への影響に関する調査	田中仁啓	高橋伸卓、佐藤洋子		2023-2025	—

073	緩和的放射線治療に関する記述疫学的研究	山本精一郎	宮坂勇平,佐藤洋子		2023-2025	—
074	脂質異常症患者における医療機関受診の頻度が脳血管イベント、心イベント及び死亡率に与える影響	菅原 照	松永拓、中谷英仁		2023-2025	—
075	フルオロキノロン系抗菌薬によるくも膜下出血の因果リスクの推定	中谷英仁	植木力		2023-2026	—
076	急性 B 型大動脈解離に対する治療成績のレセプトデータによる把握	中谷英仁	植木力		2023-2026	—
077	非感染性疾患に関する大規模国際疫学調査	田原康玄	佐藤洋子		2023-2027	—
078	生活習慣病患者における初回薬物治療の種類が心イベント、脳血管イベント、死亡率及びコストに与える影響	菅原 照	松永拓、中谷英仁、金田秀昭（沖中記念成人病研究所）		2023-2025	—
079	大腿骨骨折の記述疫学的分析とリスク因子の解明	田原 康玄	臼井健、松浦杏美		2023-2025	—
080	季節性アレルギー性鼻炎や環境要因と小児喘息悪化との関連	竹内正人	中谷英仁、大庭亜由子		2023-2024	—
081	SKDB を用いた静岡県糖尿病有病率の地区別推計	竹内正人	山本 精一郎、田中 仁啓、佐藤 洋子		2023-2025	—
082	先天性胆道拡張症/脾・胆管合流異常患者のフォローアップ状況および晩期合併症の検証	佐々木八十子	三宅啓		2023-2025	—
083	持続する孤立性拡張期高血圧と心血管イベントとの関連：SKDB 研究	竹内 正人			2023-2025	—
084	SKDB を用いたこども医療費助成政策が Ambulatory care-sensitive conditions (ACSCs) 入院に与える影響に関する研究	佐藤洋子	種村崇、田中仁啓、竹内正人、栗山長門	—	2023-2025	—
085	酸分泌抑制薬の処方状況の解析	中谷 英仁	今市悠太郎（客員研究員）、栗山 長門、菅原 照、臼井 健	—	2023-2026	—

静岡社会健康医学大学院大学で実施されている研究の概要

001: レセプトデータを用いた 2 型糖尿病患者における心不全入院の発生率および医療費・医療資源に関する後向きコホート研究

日本において高齢化に伴い糖尿病人口は年々増加傾向にあり、厚生労働省が 2016 年に行った調査では 1000 万人と推定された。糖尿病は循環器疾患や慢性腎不全といった疾患のリスクファクターであることが報告されている。合併症の中でも心不全は入院や死亡のリスクを高め、心筋梗塞や脳卒中との併発率も高い不可逆的な疾患である。また、増悪によって入退院が繰り返されるため、地域の保健医療財政にも大きなインパクトを与える。これまで日本国内では心不全入院費に関する DPC 行院データを用いた先行研究があるが、これらの研究では外来での診療費用などは含む長期的な予後・資源利用のフォローアップはなされていない。本研究は、レセプトデータを用いて 2 型糖尿病患者における心不全入院や治療の実態調査を行い、包括的な視点から患者予後、医療重利用の評価を行うこととする。

002: SKDB データベースによる带状疱疹及び带状疱疹後神経痛の発症リスク因子解析

带状疱疹とは、脊髄後根神経節に潜伏感染した水痘・带状疱疹ウイルスの再活性化により発症する皮膚疾患です。国内での疫学研究では年間 1000 人あたりの带状疱疹患者は 4.15 人であり、増加傾向にあることが指摘されています。合併症として带状疱疹後神経痛の他、Ramsay Hunt 症候群、眼合併症、髄膜炎や脳炎、血管炎・脳梗塞等のリスクもあります。また、带状疱疹患者の 7～25%が带状疱疹後神経痛を発症するとされており、慢性的な神経痛により QOL の低下や社会生活に支障を及ぼします。過去の研究では、带状疱疹後神経痛のリスク因子として高齢、女性、前兆として現れる症状、発疹の重症度、急性の疼痛の重症度が報告されていますが、研究は少なく十分に解明されていません。また、带状疱疹は癌患者やステロイド・免疫抑制剤治療等の免疫抑制状態がリスクであることが分かっていますが、带状疱疹後神経痛に関しては免疫抑制状態との関連は明らかではありません。本研究では静岡県国民健康保険団体連合会のレセプト集計によるビッグデータを用いて、患者背景について年齢、性別、発症月、地域差、併存疾患(悪性腫瘍、糖尿病、移植患者、自己免疫疾患、免疫不全症、透析患者など)、治療内容(化学療法、免疫抑制剤、ステロイド、生物学的製剤)について分析します。また带状疱疹後神経痛発症のリスクを調べ、带状疱疹後神経痛発症の増悪因子について探索します。本研究により今後の带状疱疹や带状疱疹後神経痛患者に対する治療や発症予防の発展に役立つことが期待されます。

003: SKDB データベースによる医療・介護システム評価研究

1980 年代から世界一の長寿国として優れた保健アウトカム指標を誇ってきた我が国であるが、近年は少子高齢化や人口増加、政治経済の諸要因に伴い、持続的な保健システムの再設計が喫緊の課題である。本研究では、疾病・介護リスクのエビデンスの構築、医療資源の効率的配分を目的とした既存の医療・介護システムの再評価を実施する。具体的には医療・介護ビッグデータを用いて、1 疾病・介護リスクの早期発見と将来のリスク予測のための数理モデルの構築、さらに 2 過剰な医療介入の関連コスト・要因の同定を行う。本研究は、世界に先駆けて超高齢社会に突

入した我が国の健康システムを再評価し、日本の医療・介護改革の最善の解決策を見つけるための新たなデータを提示するものである。国・地域レベルで持続可能な保険システムの実現に向けた具体的施策を毛脳するのみならず、健康格差是正に向けた健康管理、疾病・介護予防、重症化予防の推進に関する研究や政策立案などに活かされることが期待される。

004: SKDB データベースによる免疫チェックポイント阻害薬の薬剤使用と副作用の実態調査

免疫チェックポイント阻害薬は、免疫反応活性化により抗腫瘍効果を発揮するが、その作用機序から自己免疫疾患を惹起する可能性が考えられている。様々な免疫関連有害事象の発生が報告されており、副作用の特徴として発現頻度は希だが命に関わる重篤な副作用を発生し、全身のあらゆる臓器に発生しうる多様性がある点でアル。現状の副作用報告は、ケースレポートなど短期的な報告があるものの、長期成績については日本内分泌学会を中心に疫学調査のデータ収集を行っている段階であり、多数例での報告は少ないのが現状である。本研究は、免疫チェックポイント阻害薬の薬剤使用と副作用の発症を記述することを目的とする。本研究により、免疫チェックポイント阻害薬使用後の副作用のリスク因子などを解明し、より適切な症例に問うよされる環境構築に寄与できると考える。

005: SKDB データベースによる手術や処置とアウトカムの関連性について

これまで様々なデータベースで、手術や処置と生存や合併症などのアウトカムの関係性については研究されてきた。しかし、これまでの研究では、1 介護状態などのデータは含んでいないことが多くその関連性は不明であること、2 新規技術に対しての迅速な評価が難しいこと、3 アウトカムのフォローアップについて不十分であること、4 希少な事柄についてはサンプル不足サイズにより研究が難しい事象があること、などの問題点があった。本研究課題では、静岡県市町国民健康保険及び後期高齢者保険の加入者の 2012 年 4 月以降の健診データの経年変化および医療レセプトデータ、介護保険審査データとの突合データを使用し、手術や処置とアウトカムの関連性について、1 介護情報などを含む背景因子によるリスクの推計、2 新規収載された処置・術式の評価、3 背景因子ごとに処置の前後やアウトカム前の資源利用について明らかにすることを目的とする。本研究の成果により、介入のための個人のリスクに基づいた基礎情報となること、新規技術の評価が最先端でおこなうことができ必要な政策発信ができること、医療の最適化のために重要な情報が得られると考えている。

006: レセプトデータを用いた高齢者のフレイル測定、評価指標と薬剤使用実態や臨床アウトカムとの関連に関する研究

日本は世界で一番の高齢社会と言われています。加齢とともに心身の活力(運動機能、認知機能など)が低下して、生活機能に不便をきたす状態をフレイルと呼びますが、高齢社会の中でフレイルをよく理解し、健康改善に働きかけることは喫緊の課題の一つとなっています。フレイルは可逆的な状態で、適切な支援を行うことで生活機能の向上が可能であると考えられています。これまでに運動機能や認知機能を直接評価尺度と照らし合わせてフレイルの測定を行ってきましたが、測定にかかるコストは少なくありませんでした。このような背景の中、診療・介護情報を含む医

事・介護の請求データ（レセプトデータ）を用いたフレイルのリスクスコアの算出が提唱され、フレイルの測定や、フレイルと予後との関連の評価を比較的大規模に、低コストで行えるようになりました。しかしながら、日本においてレセプトデータを用いたフレイルの実態の調査やフレイルと治療との関連に関する研究は未だ少なく、大規模データでの評価が必要とされています。今回の研究では、静岡県国民健康保険ならびに後期高齢者医療制度加入者の医療や介護のレセプトデータ、健診データを用いて、心房細動の診断を受けた方、275 歳以上の高齢者、心不全で入院した方における、フレイルの測定や妥当性の検証、治療薬選択とフレイルとの関連及びフレイルと健康アウトカム・疾患予後との関連の評価を行います。これらの評価を通じて、静岡県におけるフレイル患者への早期段階での適切な介入支援、投薬計画の策定につながるエビデンスを創出、それが実臨床へフィードバックされることを期待しています。

007: レセプトデータに基づく疾病の頻度、年次推移、地理的分布、および季節変動の推定(重症うつ)

静岡県やその他の地域の人々の健康向上のためには、その地域の人々における各種の病気の頻度、その死亡や生活への影響、医療費や生産性といった経済的影響、社会システムへの影響等々を評価し、地域の人々の健康ニーズに応える対策を講ずることが必要です。近年、本邦の公衆衛生関連施策は、いわゆる生活習慣病および癌の対策に重点が置かれているが、現役世代の健康ニーズに応える上では、たとえば、メンタルヘルス関連疾病や、社会経済的弱者が罹患することの多い感染症、職業に関連することの多い中毒症の対策も重要である。一部の疾病は、罹患率が高い確率で受診し、診断名が診療報酬請求に用いられるため、診療報酬請求状況からその発生頻度を把握可能である。診療報酬請求データを用いて、これらの疾病の頻度、その年次推移、季節変動、および地理的分布を把握することにより、公衆衛生施策立案に役立てうる可能性がある。

008: SKDB による循環器疾患・フレイルと生活習慣病の関連解明

循環器疾患(脳血管障害・心疾患・腎疾患)は、我が国で最も多くの医療資源を消費するばかりか、個人の QOL や予後を大きく損ないます。多くの場合、循環器疾患に罹る危険性は生活習慣や生活習慣病の改善で減らすことができますが、そのことを広く社会に浸透させるためには、どのような因子がどの程度疾患の発症や増悪に関与しているのかを詳しく明らかにする必要があります。一方、平均寿命が長くなったことで、循環器疾患とともにフレイル(高齢期におけるそこはかとない衰え)も重要な社会医学的課題となっています。興味深いことに、悪い生活習慣や生活習慣病は循環器疾患だけでなく、フレイルになる危険性も高めることが分かってきました。そこでこの研究では、生活習慣、生活習慣病、循環器疾患、フレイルの関連を詳しく明らかにすることで、静岡県民はもとより、広く国民の保健、医療の向上に資する知見を得ることを目的としています。

009: 悪性腫瘍と医療機会の関連

医療ビッグデータにおいて、がんで入院加療した患者における介護度の増悪因子を探索した報告はほとんどない。これまでの労災病院グループの病歴調査など大規模データベース解析の経験を活かして、静岡国民健康保険と後期高齢者医療保険加入者の KDBID を使い、レセプトデータ、

介護データと特定健診・特定保健指導を突合した SKDB の解析を行った。2012 年から 2018 年の期間中に、大腸がんで初回の手術入院を行った患者の入院前後の介護度、介護度の増悪に影響を及ぼす因子を探索する。更に、入院前後の医療費、介護費の変化と入院後の医療費、介護費の増加に関する因子を同定し、介護を含む地域包括ケアの課題を明らかにする。

010: スタチンと膵癌発症の関連解析

膵癌の患者は 5 年生存確率が 6%未満と見積もられていて、癌の中でも特に進行が早く、予後も悪いといわれています。膵癌の発症を予防することを探るために、過去に多くの研究がされてきました。その結果、脂質異常症の患者に使われるスタチンという薬が膵癌の発症予防効果がある可能性があることがわかりました。しかし、研究によっては効果を期待できない結果となっているものもあり、今なお結論ははっきりしておりません。本研究では、過去の研究よりも対象人数を増やして、スタチンと膵癌発症の関連解析を行います。これらの関連性が明らかになれば、膵癌発症リスクの高い患者に対して膵癌発症予防の有効な手段の 1 つとしてスタチンを用いることができる未来が期待されます。また、静岡県市町の国民健康保険および後期高齢者保険加入者の記録をもとに解析を行うことで、静岡県住民に特徴的な膵癌発症の危険が高い人の特徴が明らかになります。これにより、静岡県で行われる健診情報をもとに積極的に膵癌の検査、予防を行うべき人を明らかにできます。

011: 院外心肺停止蘇生後患者の長期予後に関する研究

院外心肺停止患者の蘇生率・脳神経障害の発生率・後遺症の発生率は年々改善していますが、蘇生後患者の長期にわたっての生存率・社会復帰・介護の状態については十分わかっておりません。本研究では高齢者の基礎疾患・介護度とその心肺停止後の長期予後の関係を明らかにすることを目的とします。期待される成果として、患者とその家族、関連する医療従事者が先の見通しを理解しやすくなること、今後の社会全体の医療政策に貢献できることが考えられます。

012: KDB データを用いた大動脈弁置換術後の成績の研究

心臓弁膜症は高齢者における重要な健康課題となっています。特に大動脈弁狭窄症に対しては近年、経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)などの低侵襲治療が急速に発達しており、今後ますます適応が拡大されることが予想されます。しかし、このような技術のもとになる生体弁を用いた大動脈弁置換術後の生存率や再手術、出血・塞栓合併症などの長期間での成績についてはまだ我が国での詳細なデータが十分に得られてはいません。今後の大動脈弁疾患の治療を考えていく上で、本邦での大動脈弁術後の患者さんの状況を把握して、現在の手術治療の改善点を検討することが重要です。本研究では、静岡県市町国民健康保険・後期高齢者保険の加入者における医療・介護レセプトデータを用いて、大動脈弁置換術後の長期間の治療成績を検証することを目的とし解析を行います。

013: 多発性のう胞腎の新規治療薬剤に関する研究

多発性のう胞腎は中年期に発症する腎臓の病気で、透析になる原因として第 5 位の疾患です。以

前は適切な治療法はなかったのですが、2014 年よりトルバプタンが疾患の進行を遅らせることがわかり、治療薬として使用されています。しかし、この薬剤の副作用や安全性、そしてどれくらいの方が継続して服薬できているかについてはまだ不明なことが多いです。この研究では、トルバプタンの服薬継続や安全性について明らかにし、より安全に薬剤を継続できるための情報を得ることを目的としています。

014: KDB を用いた慢性硬膜下血腫術後再発および再発抑制因子に関する検討

慢性硬膜下血腫は、軽度な頭部外傷などの後、約 1-2 ヶ月かけて、頭蓋骨の下にある脳を覆っている硬膜と脳との隙間に血が貯まる病気です。血腫が脳を圧迫し、頭痛、物忘れ、歩行障害などの症状が起こります。治療には外科手術が行われますが、10-20%程度で再発し、再手術が必要となります。本研究の目的は静岡国保データベース (SKDB) を用いて、慢性硬膜下血腫術後の再発リスク因子を明らかにすることです。慢性硬膜下血腫は高齢者に多い疾患であり、手術後の再発を抑制する因子が明らかになれば、多くの高齢者の ADL (日常生活動作) および QOL (生活の質) の向上につながることが期待されます。

015: 後期高齢者における経カテーテル的大動脈弁置換術後の予後と身体的フレイルの関係の検討

心臓にある 4 つの弁のうち、左心室と大動脈の間にある弁を大動脈弁といい、全身に血液を送るポンプの役割をしています。大動脈弁が動脈硬化によって硬くなり狭くなる大動脈弁膜症は高齢者に多い疾患で、息切れや心不全などが起こり、1-2 年で死亡するリスクがあります。傷んだ大動脈弁を取り換える必要がありますが、外科手術リスクが高い高齢者に対しては、経カテーテル的大動脈弁置換術 (TAVR) が実施されます。TAVR は標準治療と比較して生命予後を改善させることが報告されていますが、2 年死亡率が 40%程度と依然として高い状態です。フレイルとは健康な状態から要介護状態への移行段階の状態のことをいい、特に体重減少、握力低下などは身体的フレイルといわれます。身体的フレイルが TAVR の予後評価として有用であることが報告されています。本研究の目的は、静岡国保データベース (SKDB) を用いて、後期高齢者における TAVR 実施後の生命予後と術前の身体的フレイルとの関係を明らかにすることです。本研究の成果は超高齢者を含む重症患者への手術適応を検討する際の重要なエビデンスとなることが期待されます。

016: 高齢糖尿病患者の長期予後の実態調査および健康寿命延伸を目的とした血糖管理目標の個別化と薬剤選択の最適化に向けたコホート研究

現在、65 歳以上の高齢者の 4 人に 1 人が糖尿病に罹患しているといわれています。糖尿病の血糖管理目標設定には主に HbA1c が用いられていますが、高齢糖尿病において血糖管理が厳しすぎると無症候性低血糖のリスクが増える恐れがあるといわれています。高齢糖尿病の最適な HbA1c は罹患歴の長さによって異なる可能性が報告されていますが、高齢者は患者背景が多種多様なため、大規模研究では除外されることが多く、HbA1c や治療法による予後の違いは明らかになっていません。本研究の目的は、静岡国保データベース (SKDB) を用い、高齢糖尿病患者さんを対象に、糖尿病治療内容と血糖推移 (HbA1c) による長中期的な予後の違いを明らかにすることです。高齢糖尿病と予後の関連を明らかにすることができれば、静岡県民の健康寿命の延伸や医療費適正化

のための医療管理体制の構築などに寄与することが期待されます。

017: 口腔と全身の健康に関するエビデンス創出のための研究

歯・口腔の健康は、個人の生涯にわたる QOL の維持に欠かすことのできない要素です。世界全体の 60%以上の死因を占めるのが、がん、循環器疾患、慢性呼吸器疾患、糖尿病などの非感染性疾患であり、これらの疾患を引き起こすリスク要因として高血圧、肥満、喫煙、運動、食習慣が挙げられます。このような疾患や疾患を引き起こすリスク要因と、歯・口腔の状態は密接に関連していると考えられ、歯・口腔の健康維持および歯科医療による口腔機能の維持回復が健康寿命の延伸にどの程度寄与しうるかを明らかにすることが望まれています。本研究では静岡県保連データベース(SKDB)を用いて、う蝕や歯周病などの歯科疾患と、全死亡、がん、循環器疾患、糖尿病、高血圧などの関連を明らかにすることを目指します。本研究の成果によって、静岡県市町の地域住民の口腔健康意識が向上し、健康寿命の延伸に役立つことが期待されます。

018: 残差交絡量を最小にする層別平均因果効果推定法の開発と SKDB データへの適応

医学臨床研究において、病気の原因を明らかにしたり、治療法の有効性や安全性を検討するためには、介入研究やランダム化比較試験を行い、因果関係を証明する必要があります。しかしこれらの手法は、患者さんへの介入に倫理的な問題が生じること、準備や実施に時間やコストがかかることなどで、実施困難なことがあります。その場合に、患者さんや患者さんの検査データなどを観察し分析する観察研究という手法が採用されます。観察研究で因果関係を完全に証明するのは不可能ですが、因果関係の推定の精度を上げるために様々な統計学的手法が適用されています。本研究は、静岡県保連データベース(SKDB)を用いて、観察研究から精度の高い因果関係の推定を行うための統計学的手法の開発を目指すものです。本研究の成果を他の SKDB 研究に適用することで、静岡県民の健康増進に資する社会健康施策のためのエビデンス創出促進につながることを期待できます。

019: SKDB を用いた食道癌の発症リスク因子解析

食道扁平上皮癌は 50 代以上の男性に多く、また異なる臓器に癌が発生する重複癌が約 30%の症例でみられ、頭頸部癌や胃癌が多いことが知られています。初期の食道癌は自覚症状がないことが多く、早期発見が重要です。本研究の目的は、静岡県保データベースを用い食道癌と重複癌の発症リスク因子を明らかにすることです。健診項目から食道癌や重複癌のリスクを予測することで、精密検査の受診勧奨、早期発見、早期治療を効率的に行うことができ、静岡県民の健康寿命の延伸や医療費適正化のための医療管理体制の構築などに寄与することが期待されます。

020: SKDB を用いた大腿骨骨折の患者における死亡に関する予後因子の同定

大腿骨骨折は要介護リスクや死亡リスクが非常に高いことが知られています。大腿骨骨折の発生率は女性で高い一方、その後の死亡率は男性の方が高いことも知られていますが、その原因は不明で、男女に分けて死亡のリスク因子を探索した報告はほとんどありません。また、性別の違いだけでなく、特定の併存疾患を有するなど大腿骨骨折後の死亡リスクの高いグループなども不明

です。本研究の目的は、静岡県保連データベース(SKDB)を用い、新たに大腿骨骨折を発症した患者さんのデータを用いて、男女別に長期死亡に関するリスク因子を探索することと、生存期間が短くなる集団を特定することです。本研究の成果が患者さんや医療従事者に広く周知されれば、大腿骨骨折後の早期治療を促進し、静岡県民の健康寿命の延伸に寄与することが期待されます。

021: 疾病保有者のスーパー相対死亡リスク部分集団の検出法開発と SKDB への適応

本研究責任者は静岡州市町国保データ (SKDB) を用いた大腿骨骨折患者さんの死亡予後に関する研究において、大腿骨骨折なしの集団に比べて、より高い相対死亡リスクをもつ大腿骨骨折患者さんの部分集団を同定しました。このような死亡リスクの高い部分集団は、他の疾患にも存在することが考えられ、これを明らかにすることで、医療関係者は予後を考慮した治療介入や対症療法が実施でき、また患者さん自身は注意すべき併存症がわかるようになります。本研究の目的は、SKDB を活用し、様々な疾病のスーパー相対死亡リスク集団を同定する統計学的手法を開発することです。本研究の成果を他の研究に適用することで、疾病予防や医療・保健の均てん化に繋がる知見創出が促進されることになり、効果的な予防施策の立案や、効率的な介護ケアのための基礎的知見が提供され、静岡県民の健康づくりに貢献することが期待されます。

022: SKDB を用いた間質性肺疾患の患者特性・診療実態、予後因子の解明研究

間質性肺疾患は肺の間質と呼ばれる部分に炎症や線維化が起こり、息切れや咳、呼吸困難などを生じる病気で、原因が不明で有効な治療法がないため、難病に指定されています。本研究の目的は、静岡県保連データベース(SKDB)を用いて、間質性肺疾患の特徴、診療実態、および病気の経過（予後）を明らかにすることです。本研究の成果により、間質性肺疾患の原因を探る基礎的研究に重要な知見を与え、有効な治療法開発につながることを期待されます。また、間質性肺疾患の特徴や予後などの情報が医療従事者や患者さんに広く周知されることで、早期診断の促進や地域医療および療養体制の充実が期待されます。

023: 静岡県国民健康保険データベース(SKDB)による生活習慣病および慢性腎臓病に関するハイリスク患者の特性を明らかにするための解析研究

科学や医学が急速に進歩していますが、癌、脳卒中、心臓病は日本人の三大死因として変わりなく続いており、ひとたび病気が起こると寝たきりとなる危険性も高く、健康長寿に対する大きな脅威となっています。これらの病気の原因として、生活習慣病や腎臓病が重要であることが知られています。これまで特定健診や健康日本 21 などの国の施策に従って、データの異常値が見つかった受診者に二次健診の受診勧奨や保険指導が行われてきましたが、どうしても健康意識の高い軽症受診者への対応に偏りやすい傾向がありました。それに対して本研究では、受診と指導によって、明確な効果を得るため、医療機関への受診を拒否しがちで治療意欲も乏しい受診者の健康リスクを数量化し、重点的に指導を行うことの重要性を明らかにするアプローチにより、県民の健康づくりに貢献することをめざしています。

024: 一般市民における急性腎障害のリスクおよび予後に関する社会健康医学的研究

急性腎障害（acute kidney injury：AKI）は、急激な腎機能低下と腎組織障害を呈する疾患です。AKI は稀な疾患ではありません。また、発症した場合はその後の死亡や人工透析導入など、皆様の健康に大きな影響を及ぼす可能性があります。AKI に関する研究は世界中で行われていますが、その全体像にはまだ不明な部分が多く残されています。本研究では静岡国保データベースの情報を活用して、「どのような方が AKI を発症しやすいか」「AKI を発症した方が、その後悪化するのはいかなるような場合か」などの検証を行います。得られた結果をもとに、AKI の発症を予防するための対策、AKI を発症した方への適切な介入策を提案し、県民の皆様の健康寿命延伸に貢献したいと考えています。

025: 静岡 KDB を用いた脳性麻痺患者の死亡時期とその原因について—呼吸器関連症は直接死因と関連するか？—

脳性麻痺児のうち、重症心身障害児と呼ばれる方（主に自分で立つことができない方）の寿命は、近年の医療技術の向上により改善してきています。しかしまだ不明な点も多く、何歳頃にどのような致命的な合併症が起こるかは、十分にわかっていません。本研究の目的は静岡国保データベース（SKDB）を用いて、重度脳性麻痺児の生命予後とその合併症の関係を明らかにすることです。この結果により、脳性麻痺の方々の合併症のうち早めの治療が望ましいものがわかり、QOL（生活の質）を下げずに人生を送ることができるようになることが期待されます。

026: 多発性骨髄腫患者における自家末梢血幹細胞採取の検討:化学療法併用と plerixafor 使用の医療費について

移植可能な多発性骨髄腫の患者に対して、自家末梢血幹細胞移植が実施されるが、それに先立ちアフェレーシス*1を行う。アフェレーシスは、患者にとっては身体的にも経済的にも負担となるため、より早く十分な幹細胞を採取することが重要である。近年、アフェレーシスの方法として、G-CSF 単独、または化学療法と G-CSF 併用の 2 パターンが存在する。それに加えて、採取効率を高める目的で、plerixafor（モゾビル®）を利用した自家末梢血幹細胞採取が増加しているが、plerixafor は高額な薬剤で、医療資源の有効利用やコストについては十分に検討されていない。我々は、静岡県 KDB を解析し、アフェレーシスの方法として、G-CSF 単独群と化学療法と G-CSF 併用群のどちらが合併症の発生や医療費に優れるか、また、plerixafor の使用群と非使用群で、採取日数や入院日数、医療費を検討する。静岡県の plerixafor の使用状況や多発性骨髄腫の診療の実態が明らかになり、限りある医療資源の有効利用につながる。また、多発性骨髄腫の治療選択に影響を与える可能性がある。

*1 血液中から造血幹細胞（血液のもととなる細胞）を分離すること

027: SJS/TEN 及び DIHS/DRESS の静岡 KDB を用いたリスク因子解析

スティーヴンス・ジョンソン症候群及び中毒性表皮壊死症は、薬剤を飲んだり感染症にかかったりした際に、皮膚や眼に重篤な病変があらわれる病気です。また薬剤性過敏症症候群は、原因となる薬剤を飲んで数週間後に発熱を伴って発症し急速に進行する病気です。これらの病気は、失

明や呼吸器障害などの後遺症を残すことも知られており非常に予後が悪いです。

我々は、これら病気が起こる原因（薬剤、併存症など）を、静岡県保連データベースを用いて明らかにしたいと考えています。これらの病気が起こりやすい集団を同定することができれば、予防の対策を立てることや早期に診断することが可能になります。

028: ヒドロクロロチアジドによる降圧薬療法と皮膚がん発症に関する研究

高血圧は、脳出血、動脈硬化、心筋梗塞など死に至る重大な疾患の原因となるため、血圧を正常範囲内にコントロールすることは、健康寿命をのばすために大切です。高血圧の治療として、降圧薬がありますが、日本でもよく使用されているヒドロクロロチアジドという薬は、副作用で日光かぶれをおこすことが知られていました。最近、デンマークでこの薬で高血圧の治療を行なった場合、この薬以外で治療した患者と比較すると、多くの皮膚がんが発症することが報告され注目されています。肌の色や紫外線の強さが違う日本においても、同じように皮膚がんが発症する危険性があるのかを正確に調べることは重要なことです。私たちは静岡県の患者さんのビッグデータを使って、真実を明らかにしようとしています。

029: スタチン製剤が有効である部分集団の同定及び予測モデルの開発

高コレステロール血症の治療に用いられているスタチンという薬剤があり、このクスリが心筋梗塞や脳血管疾患のリスクを減らすという報告が、幾つかの研究によってされています。しかしながら、75歳以上の高齢者について、性別や合併症などで分けると、具体的にどのような症例で有効性があるのかははっきりとわかっていません。

本研究では、スタチンがどのような症例に有効性があるのかを、大規模なデータ解析によって検討します。また解析した結果から、スタチンによる治療が個々の患者に対してどれほど有効性があるのかを具体的なスコアとして算出するモデルを作成し、治療方針を決定するための一助とします。これによって、スタチンが有効な症例に対して適切に処方することができ、高齢者の健康寿命の延伸へとつながります。また、有効性が見込まれない症例についてスタチン製剤の使用を中止することで、不必要な医療費を減らすことにも繋がります。

030: 予防的婦人科臓器切除術の卵巣癌・卵管癌・腹膜癌発生リスクへの影響

卵巣癌・卵管癌・腹膜癌は発見時に進行癌であることが多く、女性特有のがんの中で、もっとも早期発見することが難しく、死亡率の高い悪性腫瘍です。近年、家系内に乳がんや卵巣癌が多発する遺伝的な特徴をもつ方に対しては、予防的に卵巣や卵管を切除することで、これらの癌の発生を防ぐとともに、死亡リスクも低下させることがわかっています。

現在、卵巣癌・卵管癌・腹膜癌は、卵管から発生するという学説が広く受け入れられており、良性疾患で子宮や卵巣、卵管の手術をする際には、妊娠・出産の希望がない場合には、予防的に卵管（閉経後であれば卵管と卵巣）を切除することも選択肢として検討することが推奨されていますが、遺伝的背景のない方に対してもこれらの恩恵があるのかに関しては、完全に決着はついていません。本研究は婦人科手術を受けるときの治療選択肢に明確な指針を与えてくれることで、卵巣癌・卵管癌・腹膜癌で苦しむ患者さんを減らしてくれることにつながると考えています。

031: オレキシン受容体拮抗薬による大腿骨骨折への影響

近年睡眠薬が転倒や骨折のリスクとなっていることがわかってきております。日本人を対象にした調査によれば、5人に1人が「睡眠で休養が取れていない」、「何らかの不眠がある」と回答しており現在の日本において不眠症は国民病となっております。睡眠剤は睡眠の導入や維持を調節するよい薬ですがその反面まれにせん妄状態(脳がうまく働かなくなることで興奮状態になることや、ふるまいに異常が出たりすること)をきたすことがあります。睡眠薬によりそういったせん妄などの判断力が低下した状態になることにより、転倒や大腿骨骨折をきたすことがあります。いったん大腿骨骨折を受傷すると寝たきりなどになってしまうなど生活に大きな支障をきたします。そのため2014年にオレキシン受容体拮抗薬という新しい種類の睡眠導入剤が販売されました。この薬はせん妄の危険性が従来の睡眠薬より少ないとされていますが大腿骨骨折との関係はまだわかっておりません。我々は、今回新規睡眠薬であるオレキシン受容体と大腿骨骨折の関連を調べ皆様の健康長寿につながる知見が得られないかデータベースを用いて研究を行います。本研究に登録されたデータは、匿名非連結化され、個人が同定できない状態で解析いたします。本研究の研究計画は、どなたでも入手でき、研究の方法などに関して閲覧可能です。

032: 新規発症の大腿骨骨折患者における予後予測ツールの作成

高齢になり大腿骨骨折をおこすと要介護や死亡につながってしまうことから、骨折の予防と同様に骨折後の治療やケアが重要となります。我々は静岡縣市町国保データベースを利用して、大腿骨骨折をおこした患者のデータを分析し、骨折後の死亡に関わる要因を明らかにし、さらに骨折後6ヵ月や1年における死亡率を予測するツールを作ります。これにより骨折した当人や家族が、骨折後の経過を知ることができるとともに、医療者も状態に応じた治療や介護の計画を立てることができます。これは、将来、大腿骨骨折をおこした患者が、受けたい治療やケアを選択するための重要な情報になり、さらには、重篤な患者に対する治療法の開発のための重要な情報になります。

033: 慢性腎臓病患者におけるリハビリテーションの実施効果

慢性腎臓病の悪化を予防する方法として、リハビリテーションによる運動療法が挙げられ、腎機能を改善することが報告されています。しかしながら、リハビリテーションの効果として、透析になることを予防できるかといった点や、臨床現場で実際にリハビリテーションが行われているかの確認は未実施です。

本研究では、慢性腎臓病患者に対するリハビリテーションの効果を、医療ビッグデータの解析によって検討します。解析した結果から、慢性腎臓病患者に対するリハビリテーションを適切に処方することができ、静岡県民の健康寿命の延伸へとつながります。また、リハビリテーションが実際の臨床現場でどのように行われているかが明らかになることで、静岡県におけるリハビリテーションの実態を明らかにすることができます。

034: 先天性小児外科疾患を持つ児の遠隔期における問題点の検討

生まれつき腸などの臓器に異常があり、手術を必要とする病気のお子さんは一定の割合で生まれます。こういった病気のことを小児外科疾患と呼びます。手術技術や手術前後の管理といった

小児医療の進歩により、小児外科疾患を持つお子さんが病気により状態が悪くなることは少なくなっています。

一方でこのような病気を持つ方は、病気特有の長期的な問題や、同時に生じやすい病気（合併疾患）により、手術が終わった後も種々の治療やリハビリを必要とすることがあります。また、こういった手術を行って時間が経ってから生じる問題により、以前よりも状態が悪くなる可能性もあります。我が国の医療制度の中で、こういった疾患を持つお子さんがどれくらいの治療やケアを必要としているかについては調査が継続されています。

この研究では、静岡県で育っている小児外科疾患を持つお子さんが、どのような問題を抱え、どのくらいの頻度で医療的なサポートを必要としているのかを調べ、将来を担う世代が必要なサポートを得られているのか、もしサポートが十分でないとしたらどのようなことが有用であるかを明らかにすることが目的です。

035: がん早期発見・早期治療に伴う医療費削減効果の検討

がん対策推進基本計画では、大腸、胃、肺、乳、子宮頸がんのがん検診受診率 50%を目標としていますが、多くのがん検診はその目標を達成していません。がん検診の目的は、がんによる死亡率の減少であり、医療費削減ではありませんが、その費用対効果を調べることは重要です。これまでに、がん検診の医療費削減について、理論的な研究はいくつかなされているものの、我が国の実際のデータを用いた研究はほとんど行われていません。そこで、本研究では、静岡県保連データベース（SKDB）を用いて、がん検診の費用対効果を調べるために、最も費用対効果が高いと考えられる大腸がんを例に、静岡県での大腸がん早期発見・早期治療に伴う医療費削減効果の検討を行います。そのあと、その方法をさらに発展させて、他のがん検診においても同様の検討を行う予定です。がん早期発見・早期治療に伴う医療費削減効果を明らかにすることによって、がん検診受診率向上を都道府県・市町村の政策として推進するための重要なエビデンスとなることが期待されます。

036: アルコール使用障害患者の予後因子解析

お酒（アルコール）は祝い場や懇親の場に欠かせないものである一方で、依存性が高い嗜好品です。アルコールを繰り返し多量に摂取した結果、精神的・身体的にアルコールに依存し、自分の意思では飲酒のコントロールができなくなる状態がアルコール使用障害です。アルコール使用障害は精神的・身体的な問題や家庭や社会生活に著しい問題を生じさせ、本人だけでなく家族へ深刻な影響を引き起こしてしまふことがあります。また、肝疾患、脳卒中、認知症などを発症するリスクがあることも報告されています。

私たちは、静岡県国保連データベース（SKDB）を利用して、アルコール使用障害の患者さんのデータを解析し、疾患を発症した後どのような経過や予後をとるのか、また、どのような患者さんの予後が悪いのかを明らかにしたいと考えています。本研究の成果によって、アルコール使用障害の患者さんの治療や支援、ケアなどの質がより向上させるための知見を得ることが期待されます。

037: 組織欠損に対する遊離組織移植による再建手術における術後合併症に対するリスク因子の探索

悪性腫瘍に対する腫瘍切除や、大きな外傷により身体の一部に欠損が生じることがあります。欠損を埋めるために身体他の部分の組織を採取し、欠損に移植する手術を遊離組織移植による再建術といいます。この手術では血管吻合を行い、動静脈をつなぐ必要があります。遊離皮弁移植術において血管吻合部の血栓は皮弁の壊死を来す重大なトラブルですが、血栓の危険因子や原因についてはまだ明らかになっていません。本研究では、その危険因子や原因を調べるために静岡

県市町国保データベースを用いて、その原因をデータから見つける予定です。本研究の結果から、遊離皮弁移植による再建術を患者さんに行う場合に、手術適応の判断の根拠となる知見を得る事を目的としています。

038: 抗ヒスタミン薬とう蝕発生の関連

抗ヒスタミン薬(ヒスタミン H1 受容体拮抗薬, H1-receptor antagonist)は、アレルギー性鼻炎、蕁麻疹、皮膚掻痒症などに対して使用される薬です。一般的には副作用は少なく安全性の高い薬ですが、それを長期に内服した場合は、唾液分泌量が減少することで虫歯になりやすくなる可能性が指摘されています。しかし、このことはこれまで十分に検証されておらず、小児を対象とした報告がわずかにあるものの、一般成人を対象にした研究は行われていません。

この研究では、静岡国保連データベースを解析することにより、抗ヒスタミン薬の使用と虫歯の発生にどのような関係があるのかどうかを調べます。薬の種類や服用期間によってどのくらい虫歯になりやすくなるかが明らかになり、それへの対策により将来的には虫歯になってしまう方を減らすことができる可能性があります。

データは匿名で解析されます。研究成果が学術目的のために論文や学会で公表されることがありますが、その場合も患者さんの個人情報が増えることはありません。

039: アレルギー性疾患とてんかん性発作の関連

発作とは、脳内の電気信号が乱れることで引き起こされる、「ひきつけ・けいれん」「ボーっとする」「体がピクっとする」「意識を失う」などの症状です。発作を引き起こす病気に、「てんかん」や「熱性けいれん」などが知られています。発作時間が長引くなど、重い発作の場合は、入院が必要となることがあります。

近年、気管支喘息をはじめとするアレルギー性疾患の患者さんで、発作の頻度が高くなる可能性を示す研究結果が報告されています。また、アレルギー性疾患のある種の治療薬が、発作を誘発したり、反対に発作を抑制したりする可能性を示す研究結果も報告されています。

本研究では、静岡国保データベース(静岡 KDB)を用いて、アレルギー性疾患やその治療薬と、発作との関連性を調べます。特定の薬が発作を誘発したり抑制したりすることが示され、アレルギー性疾患の治療に際して発作を引き起こしにくいような処方の仕方が分かれば、アレルギー性疾患の多くの患者さんの発作予防に繋がることが期待されます。

040: SKDB を用いた胆石症発症に関するリスク因子解析

急性胆道炎(急性胆嚢炎、急性胆管炎)は胆道閉塞による炎症と胆汁感染を背景とした疾患で、胆石が根本的な原因となるが、早期診断・治療が遅れると重篤化し敗血症や臓器不全で死亡率が高くなるため临床上重要である。しかしながら、これらは欧米から、あるいは単一施設からの報告が多く、本邦で疫学的に検討されたものは少ない。このような背景から、本研究では、静岡国保データベースを用いて、胆石症発症のアウトカム、健診結果及び併存疾患の情報を抽出し、これら基礎疾患や生活習慣から、胆石症発症に関するリスク因子を探索する。急性胆道炎の根本的な原因である胆石症の発症リスクを同定することで医療費削減、患者の QOL 維持に貢献できると考える。

041: 認知症・脳血管障害・骨折に対する入院時リハビリテーションの頻度・期間が退院後の要介

護度およびその経過に与える影響：静岡国民健康保険データベース(SKDB)を用いた検討

要介護状態となることは患者さん本人だけでなく、家族にとっても身体的および精神的に負担の大きいものです。その要介護状態の主な原因である認知症・脳血管障害・骨折は、リハビリテーションが必要な疾患であると言われています。しかしながら、リハビリテーションが実際に行わ

れているかといった実態調査やリハビリテーションの効果は検証されていません。

本研究では、認知症・脳血管障害・骨折に対するリハビリテーションの効果をも、医療ビッグデータを解析することで明らかにします。解析の結果から、リハビリテーションが必要な疾患に対して適切に行われるような政策に結びつき、静岡県民の健康寿命の延伸に資する可能性があります。

042: チロシンキナーゼ阻害剤治療を受けた慢性骨髄性白血病患者の有害事象リスク因子解析

慢性骨髄性白血病（CML）は、がん化した血液細胞が無制限に増殖することで発症します。治療の中心は、チロシンキナーゼ阻害薬（TKI）の内服です。現在 TKI には複数の種類があり、内服方法や副作用が異なるため、持病や生活様式に応じて、医師と相談して決定されます。TKI の登場により、一般の方と同じくらいの寿命が全うできるようになりましたが、一部薬の副作用（有害事象）が起きることがわかっています。

我々は、これらの重篤な副作用が起きる原因やリスクを、静岡国保連という大規模データベースを用いて研究します。重篤な副作用の原因やリスク因子が明確になることで、それを回避・予防し、静岡県の医師や患者が安心して TKI を継続できるようになることが期待されます。

043: 市町における脳卒中予防対策の優先度の検討、及び静岡県における脳卒中発症に対する社会経済学的リスク因子の探索

現在、静岡県における脳卒中による死亡は全国に比べて高く、50 代～70 代では死因第 3 位、80 代以上では死因第 4 位です。また脳卒中は、介護が必要になる原因の第 2 位、寝たきりの原因の第 1 位でもあります。脳卒中による死亡や寝たきりを減らすためには、脳卒中発症の予防対策が重要です。すでに、脳卒中を引き起こす因子は、高血圧、糖尿病、脂質異常症、肥満などが明らかになっていますが、市町単位の特徴に合わせた対策を行うためには、詳細なデータ解析により、その証拠を見つけるが必要があります。そこで本研究では、静岡県市町国保データベース（SKDB）という医療ビッグデータを用いて、脳卒中発症のリスクとなる複数の要因を静岡県で再確認します。次に、市町ごとに、リスク要因ごとの人口寄与危険割合（そのリスク要因を改善してなくすることで脳卒中発症がどのくらい減少するか）を計算します。人口寄与危険割合が高いリスク要因は、その市町で優先して対策すべきです。市町の重点課題を提案することで、県民の健康寿命の延伸につなげます。

044: KDB を用いた高齢者の急性期脳梗塞に対する機械的血栓回収術後の予後および経済効果の検討

近年、発症から数時間以内の脳梗塞に対する機械的血栓回収術（カテーテルを使用して、脳の血管につまった血栓を取り除く治療法）の有効性が確立され、脳梗塞患者の生命および神経予後の改善に寄与しています。高齢者においても、この治療法の有効性が報告されていますが、現在のところ長期的な予後に関する報告がほとんどありません。

本研究の目的は静岡県市町国保データベースを用いて、機械的血栓回収術を受けた高齢脳梗塞患者の一年後の予後を明らかにすることです。この結果により、高齢者における機械的血栓回収術の長期的な効果を明らかにし、急性期脳梗塞の治療成績の向上に寄与できることが期待されます。

045: 後天性血友病 A 発症のリスク因子解析

後天性血友病 A は、血液を固める（凝固）働きをする凝固因子に対して、その働きを阻害する自己抗体を産生することが原因で発症する疾患です。比較的まれな疾患ですが、徐々に増加傾向にあり、100 万人あたり 1.83 人の発症率とされています。その背景には、疾患に対する認知度が向上したこと、検査方法が確立したこと、高齢者が増えていることが関係していると言われています。後天性血友病 A の主な症状は出血です。強い衝撃を受けていないのに広範囲にあざがでたり、筋肉に出血による血の塊がでたりします。致死率は、日本の報告で 13.8-28% と言われ

ており、予後はよくありません。

我々は、後天性血友病 A が発症する原因を、静岡県保連データベースを用いて明らかにしたいと考えています。それを同定することができれば、予防の対策を立てることや早期に診断することが可能になります。

046: 訪問診療を受ける高齢者の入院リスク因子の検討

高齢化が進み、日本の医療は病院や施設など決められた場所だけで受けるものではなくなりました。住み慣れた場所で、地域の様々な方々と協力しながら、ひとりひとりが安心して生活できる環境づくりが求められています。

在宅医療を受けることで、病気が悪くなることや要介護状態が悪化するのを未然に防ぐことが可能となりました。それでも、予期せぬことが生じ、入院せざるを得ないケースがまだまだ多いのが現状です。どのような状況の方が入院する危険性が高いのか予め知ることができれば、このような不必要な入院を避けることができる可能性があります。

この研究では、在宅医療を受けている方の入院に至った原因を解析します。その結果からなるべく病状や介護状態が悪化しないようなケアを日頃から提供できるような情報を共有したいと思います。また不必要な入院を避けることで、医療費負担を軽減し、必要なときに必要な医療が受けられる環境の存続にも貢献いたします。

047: SKDB を用いた成人膠芽腫の発症リスク因子解析

膠芽腫とは、頭蓋骨の中に発生する腫瘍の約 1 割を占める悪性腫瘍です。50-60 歳に多く発生し、標準的な治療が可能な場合でも、生存期間の中央値が 14.6 カ月という、非常に生命予後が不良な疾患です。ほとんどの症例において発症の原因は不明ですが、膠芽腫を含む神経膠腫は、喘息、アトピー性皮膚炎、花粉症などのアトピー性疾患を持っていると発症の頻度が低いことが報告されています。また四塩化炭素の職業的暴露や、高い社会経済的地位にあると、膠芽腫の発症リスクが高くなることも報告されています。

本研究では静岡県国民健康保険団体連合会のレセプト集計によるビッグデータを用いて、患者背景について分析し、膠芽腫発症のリスク因子を調べます。本研究の結果が、膠芽腫の病態解明や発症予防の発展に役立つことが期待されます。

048: 経口抗菌薬の処方状況と、薬剤耐性菌感染症などの有害事象に関する SKDB 研究

細菌は微生物の一種です。乳酸菌や納豆菌など、人によって有益な細菌がいる一方で、大腸菌、黄色ブドウ球菌など、人に対して病気を起こすものも存在します。抗菌薬（合成抗菌薬と抗生物質）はそういった細菌を退治するための薬で、現代医療において欠かすことはできません。

しかし抗菌薬の使用により有害事象が出る場合があります。その代表例として、抗菌薬に曝された細菌が抗菌薬に対する耐性を獲得し、治療が困難な薬剤耐性菌に変化することが挙げられます。また、抗菌薬の使用により腸内に正常な状態で存在する細菌が淘汰されることで、薬剤性腸炎を起こすことがあります。さらに、抗菌薬が肝臓や腎臓に負担をかけることで、これらの臓器に障害が生じることもあります。

そのため抗菌薬は適正な使用（風邪など抗菌薬が無効な病気の時には使用しない、有効な病気に対しては適切な種類の抗菌薬を適切な用法で使用する）が求められます。

現在、日本ではこの抗菌薬の適正使用が大きな課題になっています。本研究では静岡県における抗菌薬使用の実態と有害事象との関連を、静岡県国保連データベース（SKDB）によって検討しま

す。解析結果をもって、抗菌薬の適正使用に関する施策へ貢献することにより、県民の健康寿命の延伸へとつながることが期待できます。

049: 下肢大切断術後患者における死亡に対する予後因子探索

生活習慣病により足に治りにくい傷ができ、下肢の切断手術を余儀なくされることがあります。下肢の切断手術は日常生活活動の悪化や死亡につながってしまうことから、下肢の切断手術を受けた人の死亡のリスク因子を明らかにする事は重要です。我々は静岡縣市町国保データベースを利用して、下肢切断手術を施行した患者のデータを分析し、術後の死亡に関わる要因を明らかにします。これにより手術した当人や家族が、術後の経過を知ることができるとともに、医療者も状態に応じた治療や介護の計画を立てることが出来ます。

050: 重症下肢虚血に対する血行再建術の有用性評価

末梢動脈疾患は動脈硬化により下肢の動脈が狭く細くなる病気で、特に糖尿病を持つ患者さんや透析患者さんでは足の潰瘍や壊疽の原因となりうる疾患として知られています。足の潰瘍や壊疽が起こると、足の痛みや傷のために歩けなくなり、ひどく悪化すれば下肢の切断が必要になる事もあり、介護が必要となる患者さんが増えています。治療法には、血液の流れを改善する目的でバイパス術やカテーテル治療が適しているとされています。この研究は、末梢動脈疾患による潰瘍や壊疽に対して、血液の流れをよくする治療後の患者さんの介護の状態がどう変化するかをデータ解析をすることで明らかにすることを目的としています。この研究によって得られた結果は、静岡県まして日本におけるこの病気の患者さんに対して、より一層良質な医療を提供することにつながることを期待されます。

051: SKDB を用いた特発性正常圧水頭症の発症リスクと予後因子解析

特発性正常圧水頭症とは、くも膜下出血、髄膜炎などの先行疾患がなく、歩行障害を主体として認知障害、尿失禁をきたし、脳脊髄液吸収障害に起因した脳神経疾患です。高齢者に多くみられ、緩徐に進行しますが、適切なシャント術によって症状の改善を得る可能性がある疾患です。多くの症例で、発症の原因は不明ですが、現時点では少数の症例対照研究があるのみです 16-20。これらの報告では iNPH のリスクファクターとして、高血圧 13)-15)、糖尿病 13)16)、低 HDL コレステロール 13)などが指摘されており、これらは、血管障害を惹起するリスクとして重要であるので、iNPH の病態機序に血管障害が関与している可能性が指摘されていますが、まだ詳しいことはわかっていません。

我々は、静岡県国民健康保険団体連合会データベースを用いて、特発性正常圧水頭症が発症する原因や発症のリスク因子、患者背景などについて分析し、明らかにしたいと考えています。本研究の結果が、特発性正常圧水頭症の病態解明や発症予防の発展に役立つことが期待されます。

052: 健康寿命の延伸など健康に関する数値改善の施策立案のための研究

2019 年の静岡県の健康寿命は、男性 73.45 歳（全国 5 位）、女性 76.58 歳（全国 5 位）となっており、トップクラスにあります。一方で、平均寿命と健康寿命の差を見ると、男性 7.96 年、女性

10.66 年となっており、他の都道府県同様、依然として不健康期間が 10 年程度見られます。本研究は、静岡県における平均寿命および健康寿命について、都道府県間の比較や、県内市区町間の比較を行うことで、課題を見つけ出し、この課題を克服するための提案を行うものです。データは人口、死亡、健康に関するデータを使います。これらのデータは、国や県、市町が保有するデータになりますが、ホームページ上で一般公開されているデータや、二次利用申請を行うことで取り寄せたデータになります。これらのデータは、地域別、性別、年齢別に集約されたデータであり、個人が識別できる可能性のあるデータは取り扱いません。本研究により静岡県の平均寿命および健康寿命において、課題のある地域、性別、年齢を明らかにすることができます。また、本研究により得られた結果は、静岡県や県内市町の健康施策や県民の健康づくりの基礎データになるものです。

053: 静岡県における尿蛋白、eGFR の脳血管疾患及び心血管疾患、死亡との関連

尿蛋白として現れる腎障害や推算糸球体濾過量から判断する腎機能低下を層別化した CKD（慢性腎臓病）の重症度分類により、末期腎不全だけでなく脳血管疾患や心血管疾患発症のリスクの判定ができることが知られています。脳血管疾患及び心血管疾患は、死亡原因の上位にあるだけでなく、要介護状態の原因にもなっており、健康寿命の延伸に大きな影響を与える疾患です。

本研究の目的は、これらの病気の発症や死亡と健診データにおける CKD 重症度分類との関連を、静岡県保連データベースを用いて明らかにすることです。これらの病気が起こりやすい集団を同定し、必要な治療につなげることが出来れば、腎疾患、脳及び心血管疾患の早期発見、早期介入が行われ発症予防や長期予後の改善が期待されます。

054: 健診項目からの維持透析導入の予測モデル開発

維持透析とは、腎臓の機能を日常的に代替する医療行為のことです。腎臓の機能が低下し、維持透析が必要になった患者さんにとっては日常生活が制限され、精神的負担も大きい治療です。腎臓は「沈黙の臓器」と呼ばれ、腎臓の機能が低下していても自覚症状が乏しいため、予防と早期発見が非常に重要です。本研究では、静岡県市町国保データベースを利用して、静岡県国民健康保険特定健康診査と後期高齢者医療制度健康診査を受診した方のデータを分析し、将来透析を新規に導入する可能性のある方の健診結果の特徴の傾向を明らかにします。これにより、健診結果を透析導入予防や、今後透析導入しなければならなくなる方の早期発見に役立てることが出来ます。

055: Clostridioides difficile 感染症の発症リスクの探索と発症予測モデルに関するデータベース内コホート研究

抗菌薬は様々な細菌感染症に対して治療効果を示す薬剤として 1928 年にアレキサンダー・フレミングによって発見され、現在まで医療現場で広く使用されています。しかし、医療者の限られた知識や誤った理解、細菌感染症の科学的知見の不足などにより抗菌薬が誤用され、多くの耐性菌や抗菌薬関連有害事象が報告されています。その典型である Clostridioides difficile 感染症は、抗菌薬の不適切使用によって正常腸内環境を破壊し、下痢を引き起こします。その感染性は高いと言われており、治療や感染制御にかかる費用を増大させると考えられています。

私たちは、静岡県国民保険加入者のデータベースを用いて Clostridioides difficile 感染症の原因を明らかにし、病気を未然に防ぐ方法を開発し医療現場に提案することで、抗菌薬の適正な使用を促し、抗菌薬関連有害事象の抑止を目指します。

056: 特定健診質問票における口腔機能関連項目の解析

健康寿命を延伸するためには、寝たきりや要介護にならないことが大切です。寝たきりや要介護の主な原因は脳卒中、認知症、骨折などですが、これらの疾患には生活習慣病が深く関係しています。生活習慣病の予防にはバランスの良い食事が大切です。食べる量やメニューに気を配ることはもちろん、口腔の状態を良好に維持することも、適切な食生活を維持し生活習慣病を予防するために大切です。

この研究では、特定健診で行われている質問調査の回答を分析し、咀嚼状態、食べる速度、間食の頻度といった口腔機能に関する回答の内容が、全身の健康にどのように影響しているのかを検討します。口腔内の症状は本人が自覚しやすく早い段階で対策がとれるため、口腔機能が全身の健康に影響していることが明らかになれば、生活習慣病の予防対策を考える上で重要な知見になります。本研究を通して、静岡県民の健康寿命の延伸の手掛かりとなる情報を共有していきたいと思います。

057: 結節性硬化症の臨床的特徴・予後・診療実態の疫学的調査

結節性硬化症は、皮膚、神経系、腎、肺、骨など全身の様々な部位に 過誤腫と呼ばれる良性腫瘍や病変ができる病気です。この病気は、難病（発病の機構が明らかでなく治療方法が確立していない希少な疾病であって長期の療養を必要とするもの）に指定されています。日本国内の患者さんは、海外での調査結果を参考に 15,000 人程度と推定されていますが、実際にどのくらいの患者さんにどのような症状が出ているのか、またどのように治療されているのかなどを詳しく調べた研究はありません。本研究では、静岡県における結節性硬化症の患者さんの人数やどういった治療がなされているのかなどを明らかにします。研究結果は、静岡県における難病対策の検討にも有用だと考えております。

058: 静岡県における妊娠高血圧症候群（HDP: Hypertensive Disorder of Pregnancy）患者の実態：SKDB を用いた記述疫学研究

結節性硬妊娠高血圧症候群は妊婦の 5～10% に生じる一般的な妊娠合併症です。母体に、浮腫み、高血圧やタンパク尿を呈し、痙攣、脳出血、心不全などの重篤な合併症を併発すると、母体死亡に至ることがあります。生まれてきた子どもにおいても、早産児・低体重出生児などのいわゆる未熟児や胎児死亡などの危険があります。しかし、妊娠高血圧症候群の原因は未だ説明されておらず、根本的な治療法は妊娠を終了することのみです。

また妊娠高血圧症候群に罹患した女性はその後、高血圧、心血管疾患をはじめ糖尿病、脂質異常症などのメタボリックシンドローム、さらには腎不全・認知症などを将来的に発症しやすいことが知られています。

本研究では静岡県内における妊娠高血圧症候群発症の実態を把握することで、母子保健における貴重な基礎データとなると同時に、周産期医療の発展、延いては女性の健康寿命延伸に寄与する可能性があります。

059: スタチンとフィブラートによる横紋筋融解症発生の関連

スタチン（HMG CoA 還元酵素阻害薬）は、メタボリック症候群のリスク因子の一つである脂質異常症の治療に対して使用される薬です。一般的には副作用は少なく安全性の高い薬ですが、まれに骨格筋が融解・壊死することにより、筋肉の痛みや脱力を生じる「横紋筋融解症」が起こることが知られています。この副作用の起こりやすさは併用する薬剤に影響を受けることが知られていますが、集団ベースにどの程度影響があるかはこれまで十分に検証されておりません。

この研究では、静岡県保連データベースを解析することにより、スタチンと、影響を与える薬剤の使用と横紋筋融解症の発生にどのような関係があるのかどうかを詳しく調べます。薬の種類や服用期間によってどのくらい発生しやすくなるかが明らかになり、それへの対策により将来的には副作用の頻度を減らすことができる可能性があります。

データは匿名で解析されます。研究成果が学術目的のために論文や学会で公表されることがありますが、その場合も患者さんの個人情報が増えることはありません。

060: KDB を用いた多剤併用と大腿骨近位部骨折発生リスクとの関連の検討

ポリファーマシー（多剤併用）とは、複数の薬を服用することによって、副作用などの有害事象が引き起こされる状態を指します。特に、内服薬が多くなりがちな高齢者にとって重要な問題であると指摘されています。近年では、ポリファーマシーが高齢者の転倒や骨折のリスクになることが多く報告されています。骨折の中でも、大腿骨近位部骨折は、多くが転倒により生じ、歩行困難となり寝たきりになるリスクが高い骨折です。本研究の目的は、静岡県保データベース（SKDB）を用いて、ポリファーマシーと大腿骨近位部骨折の関連を明らかにすることです。ポリファーマシーと骨折との関連が明らかになれば、多くの高齢者の日常生活動作（ADL）や生活の質（QOL）の向上につながることを期待されます。

061: 虫垂切除による大腸癌の発生リスクの確認

虫垂は全身をつかさどる免疫器官の一つであることが明らかとなっている。一方で虫垂は容易に閉塞し虫垂炎に至ることが多く、虫垂切除による外科治療の介入が少なくない。虫垂切除によって消化器癌の発生リスクが高まるとの報告が散見されているが一定の見解を得られていない。そのため、大規模ビックデータを用いたコホート研究にて虫垂切除と癌の発生の関連を検討する。

062: 薬剤性肺障害発生の因果リスクが推定される医薬品の探索

医薬品は、効果・効能によるベネフィットが期待できる一方で、使用後に健康上の問題が生じる可能性があります。この使用後に生じた健康上の問題を有害事象と呼びます。先行研究では、報告された有害事象について分析することで、医薬品とのリスクを検証しています。本研究では、大規模データセットを利用して、有害事象の一つである薬剤性肺障害に対して、リスクを持つ医薬品を新規に見つけるためのシステムを開発します。これにより、報告されていない医薬品について有害事象のリスクを提示することができます。この研究は、市販後医薬品の安全性管理上において有用な情報となります。医薬品に関する新たな有害事象のエビデンスを提供することで、県

民のみなさまの健康増進に貢献します。

063: 腎機能分類と医療費の関連性に関する研究

静岡県内の市町国民健康・後期高齢者保険による医療レセプトデータを用いた研究を実施しています。この研究の目的は、腎機能分類 (CKD ステージ) をベースにした医療費を算出することです。方法として、静岡県内の医療レセプトデータや健診データから、腎機能分類や併存疾患に関連する情報を抽出し分類します。その分類を基に医療費の平均と分散を計算する予定です。この結果を基に、地域特性や高齢化の状況を考慮することで、地域別の公衆衛生上の問題やニーズを把握することができます。

064: フルオロキノロン系抗菌薬による大動脈イベント発生の因果リスクの推定

フルオロキノロン系抗菌薬は、細菌感染の治療において日常的によく使用される薬の一つです。これまでに、この薬の使用によって大動脈に関連する病気（大動脈解離や大動脈瘤）の発生リスクが高まるという研究報告が幾つかあります。しかし、これらの研究は海外で行われたもので、日本人においてもフルオロキノロン系抗菌薬が大動脈の病気のリスクを上げるかどうかについては、まだ十分に調べられていません。この研究では、フルオロキノロン系抗菌薬を使った場合と、同じような効果がある他の薬を使った場合の大動脈の病気の発生率を比較し、フルオロキノロン系抗菌薬が大動脈の病気のリスクを増やすかどうかを検証することを目指しています。この研究の成果によって、大動脈の病気のリスクを考慮した適切な抗菌薬の選択ができるようになり、県民の皆様が感染症の治療をより安心して受けられることが期待されます

065: レセプトと健診データを用いた糖尿病発症予測の研究

糖尿病は、世界中で増え続ける慢性病で、早期に見つけることと適切な治療が重要です。しかし、症状が出る前に見つけるのは難しいため、糖尿病の予防や早期発見の取り組みが求められています。本研究では、静岡県市町国保連データベースを使って、糖尿病発症予測モデルを開発します。これにより、糖尿病発症リスクが高い人を早く見つけることができるようになります。この予測モデルを使って、地域の人々の健康を改善する効果的な健康教育プログラムや予防策を検討することもできるようになります。このようにして、糖尿病の発症率を減らすことや医療費の節約、健康寿命の延伸にもつながることが期待されています。

066: 脂質異常症治療における因果フォレストモデルを用いた高ベネフィットアプローチの有用性評価

高 LDL コレステロール血症に代表される脂質異常症は、心筋梗塞や脳梗塞のリスクとなることが知られています。現在の脂質異常症の薬物治療は、「LDL コレステロールが高い」などのリスクが高い人々に対する治療が一般的です。しかし、リスクが高い人々にも個人差があり、この治療方法が本当に効果的であるのかは分かっていません。一方で、近年発達してきた機械学習を応用することで、個人レベルの治療効果を推定することが可能となりました。本研究では、大規模なデータベースを用いて、この個人レベルの治療効果の推定が、脂質異常症の治療において有用

であるかを検討します。これにより、個人差に合わせた最適な医療を提供し、薬物治療の効果を高めることが可能になると考えています。本研究の成果は、検査値だけでなく、個人の様々な背景に合わせた「オーダーメイド医療」の礎になると期待されます。

067: 糖尿病患者における膵癌発生のリスク因子の検討

膵がんの発症のリスク要因として糖尿病が知られていますが、糖尿病患者さんにおいてどのような特徴を有する方が、特に膵がんを発症しやすいかについてはまだ明らかになっていません。膵がんは予後不良ながんであり、早期診断や早期治療が重要です。我々は糖尿病患者さんにおける膵がん発症のリスク要因について、静岡県市町国保連データベースを用いて明らかにしたいと考えています。このリスク要因を同定することができれば、糖尿病患者における膵がんの予防対策や膵がんの早期診断の一助になり得ると考えています。

068: 橈骨遠位端骨折における二次性骨折リスク因子の検討

手首の骨折（橈骨遠位端骨折）は骨粗鬆症により生じている場合があります、そのような方は骨折を繰り返すことで徐々に生活の中でできることに制限が出てきます。しかし、手首の骨折後に骨密度の検査や骨粗鬆症の治療をする患者さんが多くはないのが現状です。どのような患者さんが骨折を繰り返しやすいのか研究することで、特に骨粗鬆症治療をするべき患者さんを明らかにする必要があります。私たちは静岡県市町国民健康保険データベースを用いてこの原因を研究したいと考えています。

069: 高齢者における急性 A 型大動脈解離の術式選択の妥当性について

A 型急性大動脈解離は心臓に近いところで大動脈内膜に亀裂が入り、血管壁が二層に分離してしまう疾患です。死亡率が高く、速やかな治療介入が求められます。有効な治療は手術法しかなく、解離を起こした大動脈を人工血管に置換する必要があります。救命を目的とした標準手術と根治性を高めた拡大手術が現在行われています。置換範囲が大きくなれば、手術侵襲が増加して手術成績に影響する可能性があります。体力がある若年者では拡大手術が選択されることが増加してきましたが、高齢者では拡大手術自体が負担となる可能性があります。本研究では、標準手術と拡大手術の術後成績を比べることで、高齢者における治療選択の妥当性を調べることを目的としています。

070: 帯状疱疹治療薬によるアシクロビル脳症発生の因果リスク推定

帯状疱疹は、加齢に伴う免疫力の低下などにより生じやすくなる痛みを伴う皮膚の疾患です。その治療薬であるバラシクロビル塩酸塩は現在最も用いられていますが、この薬による脳や腎臓への副作用の報告は現在も多く見受けられます。腎臓の機能が低下することによって、副作用が生じやすくなることは知られていますが、まだ分かっていない点が多く、十分な対策が行えているとはいえません。そこで、本研究では、静岡県市町国保連データベースを用いて、この副作用が起りやすくなる要素を明らかにすることができれば、バラシクロビル塩酸塩を用いた治療をより安心して受けられるのではないかと考えています。

071: 大腸癌の発症における高血圧の影響についての研究

大腸癌は日本人において罹患率が最も高い癌であり、死亡率も癌の中で第2位となっています。大腸癌のリスクが高くなる要因として、肥満、糖尿病、運動不足などが分かっています。しかし、大腸癌の発症と高血圧との関連についてはまだはっきりしていません。したがって、本研究では、静岡県の市町国保データベースという規模の大きなデータを使用して、大腸癌と高血圧の関連を明らかにします。高血圧と関連があれば、高血圧の方に積極的に大腸がん検診や大腸内視鏡検査を受けていただくことで、早期発見・早期治療につながります。また、大腸癌を予防するためにも高血圧にならない生活習慣を心掛けていただくことで、皆様の健康寿命が延びることにもつながります。

072: 卵巣癌の治療進歩に伴う医療費への影響に関する調査

卵巣がんは、痛みなどの症状が出にくいため、早期の発見が難しい病気です。80%以上の卵巣がん患者さんはお腹の中に水がたまった状態(腹水といいます)となつてはじめて病院を受診され、すでにお腹の中にがんが広がっている状態で診断されます。そのため、手術をはじめ抗がん剤の治療を行ったとしても、完全に治すことが難しいがんの一つです。最近登場した新しい薬剤によって長期間にわたってがんの進行を抑えることができるようになりましたが、その薬剤はとても高価です。この新しい薬剤がどのくらい使われているのか、またその使用によってどのくらい医療費が増えているのかを詳しく調べた研究はありません。本研究では、静岡県における卵巣がんの患者さんの人数や医療費、薬剤の使用状況などを明らかにします。研究結果は、静岡県における医療費の適正化対策の検討にも有用だと考えております。

073: 緩和的放射線治療に関する記述疫学的研究

この研究は、痛みのあるがん患者さんのための放射線治療について調べる研究です。放射線治療はがんによる痛みを改善する効果があることが知られていますが、日本でどのように実施されているかは十分に調べられていません。この研究では、がんによる痛みのある患者さんのうち、放射線治療を受けた方と受けていない方を比べて、どのような特性(年齢、性別、がんの種類、居住地域など)の患者さんが放射線治療を受けにくいかを明らかにすることで、より良い医療提供体制をつくるための情報を集めるのが目的です。また、放射線治療を受けた患者さんが、どのように放射線治療を受けたか(回数や照射の方法など)も調べます。対象となる患者さんは2012年から2022年までに静岡県内でがん罹患し、鎮痛薬を必要とする痛みのあった患者さんのうち、国民健康保険を利用している方です。この研究は放射線治療に関する医療提供サービスの改善に貢献することが期待できます。また、静岡県内の地域ごとの違いを調べることで、放射線治療に関する医療提供体制を優先的に拡充すべき地域が明らかになる可能性もあります。

074: 脂質異常症患者における医療機関受診の頻度が脳血管イベント、心イベント及び死亡率に与える影響

中性脂肪、悪玉コレステロールなどの言葉はなじみのある方も多いのではないのでしょうか。血中の中性脂肪や悪玉コレステロールが高いことで定義される「脂質異常症」「高コレステロール血症」

は、心筋梗塞や脳梗塞などの重要な危険因子と言われ、高リスクの方は医師の指導の下、生活習慣の見直しやお薬の服用が望まれます。しかしながら、どのくらいの頻度で医療機関を受診するのが良いのかは明らかになっていません。間隔が短い方が心筋梗塞や脳梗塞が生じる確率が低いのでしょうか、それとも間隔をある程度伸ばしても問題ないのでしょうか。もし前者であれば、なかなか成果の見えづらい医療機関への定期受診により価値を見いだせるようになるかと思えます。後者であれば、皆さまの医療機関への受診負担を軽減できる可能性があります。医療提供体制を考える上でも重要な研究になると考えており、皆さまの健康のお役に立つ結果の公表を目指します。

075: フルオロキノロン系抗菌薬によるくも膜下出血の因果リスクの推定

フルオロキノロン系抗菌薬は、細菌感染の治療において日常的によく使用される薬の一つです。これまでに、この薬の使用によって、動脈の壁に存在するコラーゲンが分解され、大動脈に関連する病気（大動脈解離や大動脈瘤）の発生リスクが高まるという研究報告が海外を中心に報告されています。脳動脈の壁にも同様にコラーゲンが多く存在することから、フルオロキノロン系抗菌薬投与によって脳動脈瘤の破裂のリスク、さらにはそれによるくも膜下出血発生のリスクが上昇するのではないかとということが懸念されています。しかし、フルオロキノロン系抗菌薬がくも膜下出血のリスクを上げるかどうかについては世界的にも少数の研究が報告されているのみで、十分に調べられていません。この研究では、フルオロキノロン系抗菌薬を使った場合と、同じような効果がある他の薬を使った場合のくも膜下出血の発生率を比較し、フルオロキノロン系抗菌薬がくも膜下出血のリスクを増やすかどうかを検証することを目指しています。この研究の成果によって、リスクを考慮した適切な抗菌薬の選択ができるようになり、県民の皆様が感染症の治療をより安心して受けられることが期待されます。

076: 急性 B 型大動脈解離に対する治療成績のレセプトデータによる把握

急性大動脈解離は欧米に比べて日本での発生率が非常に高く、重要な健康問題の一つです。特に心臓から離れた部分の大動脈が避ける B 型大動脈解離は、病気が発症した直後に亡くなる患者さんは少ないのですが、数年後に大動脈の拡大を起こして命に関わったり、再手術が必要になったりすることが多いことがこれまでの研究で明らかになってきました。そのため、近年では状況に応じて大動脈解離に対する低侵襲治療である胸部大動脈ステントグラフト内挿術 (TEVAR) を早め実施して、将来の病状の悪化を防ごうとする治療が各病院で行われています。しかし、急性 B 型大動脈解離を発症した患者さんが実際にどのような治療を受けているかについて、地域全体を対象としたデータは十分に得られていない状況です。この研究では、静岡県全体を対象に急性 B 型大動脈解離を発症した患者さんの治療状況および治療成績を検証することを目指しています。この研究の成果によって、B 型大動脈解離発症後の長期的な病状の悪化を予防するための治療方針を確立することで、県民の皆様の健康増進に役立てることができると期待されます。

077: 非感染性疾患に関する大規模国際疫学調査

高血圧や糖尿病などの生活習慣病は、脳卒中や心筋梗塞などの大きな病気を引き起こす原因とな

ります。そのため、生活習慣病を予防すること、生活習慣病の原因となる肥満を予防することは、健康な生活を送る上でとても大切です。このことは日本だけでなく、世界の他の国でも同じです。世界中で生活習慣病を予防していくことや、適切な医療を提供していくことは、人類が健康で暮らす上で欠かすことができません。しかし、地球上のどの地域や国々で生活習慣病や肥満が多いのか、また重症度が高いのか分からないと、予防や治療を効果的に行うことができません。そこで世界の様々な国から生活習慣病に関する情報を集めて、病気の頻度や重症度を調べる研究が進められています。このような取り組みは、世界から多くのデータが集まるほど完成度が高くなるため、静岡からも情報を提供し、人類の健康に貢献することになりました。提供する情報は平均値や人数などの集計値であり、個人ごとのデータではありませんのでご安心ください。世界の状況が分かることは、我が国においてどの疾患に重点的に取り組むべきかを知る手がかりとなり、翻って静岡にお住まいの皆さまの健康づくりにも役立つことになります。

078: 生活習慣病患者における初回薬物治療の種類が心イベント、脳血管イベント、死亡率及びコストに与える影響

私たちの身近にある生活習慣病は、適切な治療を受けなければ健康へのリスクが高まります。その際にどの薬を最初に選ぶかが、その後の健康状態や医療費に影響を与えることが考えられます。私たちは、静岡県市町国保データベースを活用し、初回治療として処方される薬が、健康と医療費にどのような影響をもたらすのかを研究しています。複数の薬剤の中から、どの薬が最も効果的で経済的であるのか、その結果を明らかにすることを目指しています。この研究は、静岡県民だけでなく、多くの日本人が直面する生活習慣病の治療選択に役立つ情報を提供します。正確な情報に基づき、最適な治療を選ぶことで、より健康な生活を送るための手助けとなることを期待しています。

079: 大腿骨骨折の記述疫学的分析とリスク因子の解明

高齢化が進むわが国では、大腿骨の骨折が多発しています。大腿骨の骨折は寝たきりになる危険性を高めるため、骨折を予防することは元気で長生きするためにもとても大切です。年を重ねると誰でも骨折の危険性が高まりますが、生活習慣病をお持ちの方では、さらに危険性が高くなる可能性があります。しかし、生活習慣病と大腿骨骨折との関連については、十分に明らかになっていないとはいえません。日本人は欧米人に比べて生活習慣病になりやすい体質であることもあり、生活習慣病は国民病といえるほど多くの方が患っています。そのため、生活習慣病と大腿骨骨折との関連を明らかにすることは、骨折を予防するための適切な予防方法を検討する上で重要な情報となります。この研究の目的は、静岡国保データベース（SKDB）を用いて、大腿骨骨折の実態と生活習慣との関連を明らかにすることです。両者の関連が明らかになれば、これまで以上に効果的な予防対策を立案する手がかりとなり、結果として多くの高齢者の日常生活動作（ADL）や生活の質（QOL）の向上につながることが期待されます。

080: 季節性アレルギー性鼻炎や環境要因と小児喘息悪化との関連

アレルギー性鼻炎と喘息は、共通して空気の通路の炎症により引き起こされます。小児喘息の増

加や悪化に関連する要因は多岐にわたりますが、その中でもアレルギー性鼻炎、花粉、大気汚染物質、そして天候の変化が主要な要因として知られています。

日本におけるスギ花粉症の患者数は近年増加傾向にあり、小児を含めて20年前に比べてその数は急速に増えています。季節性アレルギー性鼻炎、特にスギ花粉症と喘息の悪化との明確な関連性を示す研究はまだ十分ではありません。この関連性をデータに基づいて示すことにより、小児の花粉症やその他のアレルギーおよび喘息治療の重要性が浮き彫りになると考えられます。

加えて、天候の変化がアレルギー性鼻炎や喘息の症状悪化に影響を与えるとされています。地球温暖化の進行に伴い、異常気象の頻度が増加する中、天候や花粉の影響と喘息悪化の関連性を明確にすることで、患者がアレルギーや喘息の治療を受ける意識を高めたり、予防策として悪天候時の外出を控える、マスクの着用を徹底するなどの行動変容が期待されます。

081: SKDB を用いた静岡市糖尿病有病率の地区別推計

この度静岡市からの相談を受けて、静岡社会健康医学大学院大学では本学が保有するビッグデータである静岡縣市町国保・後期高齢者保険データベースを用いた糖尿病の研究を行うことになりました。静岡市での糖尿病患者さんの数は、全国20の政令指定都市の中で1-2を争う高い割合となっています。病気に関連する様々な患者さんの負担のみならず、高騰する医療費も考え合わせると行政としても対応策を講じる必要があると考えられます。その第一歩として、市あるいは地区別の糖尿病患者さんの数を見積もることを今回の研究の主目的とします。具体的には2009年から2020年までの健診を受けた人の検査データや質問への回答などから、患者さんの数や割合を見積もります。例えば市が管轄する保健福祉センターレベルでの患者さんの数を推計・比較することで、対策がより必要な地域を特定することにつながるなど、将来への対策の基礎資料となることなどを想定しています。なお、本研究においては個人のプライバシーが特定できないデータを用いており、また結果に関しても静岡市の行政資料としての活用を考えているため、個人が特定されるような形での公表は予定していません。

082: 先天性胆道拡張症/膵・胆管合流異常患者のフォローアップ状況および晩期合併症の検証

膵・胆管合流異常および先天性胆道拡張症という病態は、肝臓で作られる胆汁・膵臓で作られる膵液という消化液を腸に流すためのルートである胆管および膵管という管の走行に生まれつき異常があり、肝臓や膵臓に問題を引き起こしたり、癌になりやすくなる疾患です。膵・胆管合流異常及び先天性胆道拡張症と診断されると通常胆道切除もしくは胆嚢切除といった手術が行われますが、治療後も長期にわたり合併症のリスクがあることや、残った肝臓や膵臓に癌ができる可能性も他の人よりは高いとされ、長期にわたる経過観察が重要とされています。一方で比較的まれな疾患であり、すべての人が必要な経過観察を受けているかははっきりしません。また、治療後の合併症も十分な経過観察を行っている施設からの報告が中心で、問題の発生を完全にとらえられていない可能性があります。健康保険のデータを用いることで、静岡県において膵・胆管合流異常および先天性胆道拡張症の方がどのように経過観察を行われ、またどのような問題が起こっているのかを詳細に知ることができ、この疾患を持つ人にとって適切な治療を受けることにつながるこれがこの研究の目的です。

083: 持続する孤立性拡張期高血圧と心血管イベントとの関連：SKDB 研究

高血圧は全国で 4000 万人くらいの患者さんがいると考えられており、脳卒中や心臓病などのリスクとなることが知られています。高血圧は上の血圧が 140（単位は mmHg：以下、省略します）、下の血圧が 90 以上となったときと現在の日本では定められています。多くの高血圧の患者さんは双方の基準を同時に満たしますが、中には上の血圧のみ、あるいは下の血圧のみしか基準を満たさない方もいらっしゃいます。今回の研究で扱おうとしている「孤立性拡張期高血圧」とは上の血圧が 140 未満で下の血圧（拡張期血圧と正式には呼ばれます）が 90 を超えるタイプの高血圧を指しますが、このようなタイプが先に述べた脳卒中などのリスクになるかは実は十分にわかっていません。

今回、本学が保有するビッグデータである静岡県市町国保・後期高齢者保険データベースから健診を受けた方のデータを用いて、孤立性拡張期高血圧の心臓や血管の病気のリスクとなるかを検証します。この研究を通じて、県民の方の健康管理の指針となる成果が得られることを期待しています。成果は学会発表や論文文化を行うことで公表を予定しています。データは個人が特定できない形に匿名化されており、結果の公表に当たっても個人情報の保護を最大限に念頭に置いた形で公表を行います。

084: SKDB を用いたこども医療費助成政策が Ambulatory care-sensitive conditions (ACSCs) 入院に与える影響に関する研究

こども医療費助成は、家計の支払い能力に関係なくこどもが医療を受けられる制度で、近年、その対象年齢等が拡大しています。こどもの医療費負担が、医療サービスの利用や適切な外来受診による重症化予防にどのような影響を与えるかについては、まだ十分な研究がされておらず、外来への受診によって入院を予防できた可能性のある状態である Ambulatory care-sensitive conditions (ACSCs) を用いて、高校生相当（年度末年齢が 16～18 歳）まで拡大された、こども医療費助成の効果を詳しく調べた研究はありません。

本研究では、静岡県内市町におけるこども医療費助成の拡大により ACSCs による入院がどのように変化するかを評価し、その政策的効果を明らかにします。研究結果は、県や市町におけるこども医療費助成の施策効果の検討も有用であると考えています。

085: 酸分泌抑制薬の処方状況の解析

消化性潰瘍や胃食道逆流性疾患の治療に使われる酸分泌抑制薬は、効果的な治療法ですが、使用には注意が必要です。この薬の使用により、腎疾患、鉄欠乏症、新生児感染症、高齢者の精神状態変化などのリスクが報告されています。酸分泌抑制薬が腸内の細菌のバランスを変えることが、潜在的な原因として考えられています。日本では、特に小児に対する処方が米国よりも少ないことが、先行研究と公開情報より示唆されています。

本研究は、酸分泌抑制薬の処方状況を明らかにし、それにより適切な使用を促進することを目的とし、酸分泌抑制薬の処方状況を年齢、性別、基礎疾患ごとに分析します。

この研究により、日本における酸分泌抑制薬の使用状況が明らかになり、それに基づいた適切な処方の指針が提供される見込みです。これにより、地域の健康づくりや医療費削減に寄与する

ことが期待されます。